

日伯交流音楽会について

澤田貴之(以下、澤):6月に、リオ・デ・ジャネイロでブラジルへの日本移民100周年を記念した日伯交流音楽会を指揮したんですよね。

中田延亮(以下、中):はい。ペトロブラス交響楽団というオーケストラを指揮しました。

澤:ブラジル御訪問中の皇太子殿下も臨席されたそうですね。

中:そうです。休憩時間中に10分ほどお話をさせて頂きました。とても緊張していたので何をお話したかあまり覚えていませんが、最後に「次にお会いする時までさらにいい演奏をお聴かせできるよう精進します」というようなことを話したと思います。

澤:このような音楽会に招聘されたきっかけは何なのでしょう？

中:昔、イタリアで講習会に参加して以来師事している指揮者で、以前はヴェネチアのフェニーチェ歌劇場の音楽監督などを務めていらしたイサーク・カラブチェフスキーという方がいるんです。昨年、彼に講習会で会った時に「今度ブラジルでも講習会をやるんだけれども、参加する気はないか？」と誘われました。いい機会だと思ったので、早速ブラジル行きを決めたんです。

ちょうどその頃、今回の音楽会の準備も進んでいて、主催者側では当初はブラジルに在住の日系人に指揮してもらおう、という話だったらしいのですが、更に検討した結果、折角なら日本生まれの日本人の指揮者を招聘しようと言うことになり、音楽会で演奏することが決まっていたペトロブラス交響楽団で音楽監督を務めているカラブチェフスキーが私を候補に推薦してくれたんです。

実は先ほど話したブラジルでの講習会で指揮したのも同じペトロブラス交響楽団で、その時にオーケストラの楽員たちとも信頼関係を築けていたので、オーケストラとしても「ナカタが指揮するのは賛成」といってもらえたんです。一方、音楽会を主催する実行委員会としては、私のことは知らないし、ある意味で賭けの部分も思うんですが、カラブチェフスキー先生とオーケストラの意見を信じて乗ってくれたと言うことなんだと思います。

澤:当日のプログラムは何だったんですか？

中:様々な理由で、かなりぎりぎりまでプログラムに変更が続き、最終的には第1部がブラジルのクラシック音楽、第2部がボサノバ・ステージになりました。第1部のみが私の担当となり曲目は減りましたが、本場のボサノバが体験できたのでよかったですね。

プログラムは、ピラ・ロボスのブラジル風バツハ4番「プレリュード」とゲーハ・ペイシのピアノ小協奏曲でした。後は今回の演奏会は

式典でもあったので、コンサートの前に日本とブラジルの両国の国歌を指揮しました。

澤:ピアニストはどなただったんですか？

中:長年リオにお住まいになって現地でソリストとして活動されている真栄城(まえしろ)みどりさんという素晴らしいピアニストと共演できました。

日本人の指揮者とピアニストがブラジルのオーケストラとブラジルの曲を演奏する、というわけです。

あと、せっくなのでアンコールをやろうということになって、少しブラジルとは離れたように見えますが、ラフマニノフの

「パガニーニの主題による狂詩曲」の中から有名な第18変奏をやりました。

澤:ラフマニノフというのは、やや違和感も感じるけど・・

中:アンコールを始める前に、なぜこの曲をアンコールで演奏するのかを私がまず日本語で説明して、真栄城さんにポルトガル語に通訳してもらいました。

初めてブラジルに移民が行われたのは、つまり神戸港から出発したブラジル移民船、笠戸丸が出港し、

サントス港に無事着いたのは1908年です。実はラフマニノフが交響曲第2番やピアノ協奏曲第3番を書いたのもちょうどこの頃で、

その後ブラジル移民が盛んに行われていた時期とラフマニノフが活躍した時期は重なっているのです。

第1世代の移民の方々と彼は同世代、同じ時代を生きた、ということになるのですね。また、彼は1917年のロシア革命による混乱から

逃れてアメリカに移住しています。いつか故郷に帰りたいという気持ちを持ち続けながらも結局、異国の地で客死します。

理由は違えど、故郷に別れを告げ、望郷の念を持ち続けながら異国で生きざるを得なかったという点ではブラジルへ移民した方々と

ラフマニノフには相通じる面があるのではないかと、というようなこととお話しました。

澤:なるほど。いい話だなあ。

中:事前に打ち合わせしてなかったから通訳がたいへんだって真栄城さんに言われましたけどね(笑)

演奏の合間に通訳するために頭を使うのは集中力を保つためにも大変ですからね。

澤:南米のオーケストラと言うのは、日本ではなじみが薄い感じがしますが、レベルなどはどうなんでしょう？

中:意外に思われるかもしれませんが、オーケストラのレベルは高いですよ。ブラジルのオーケストラと言えばサンパウロ交響楽団が

国際的な活動をしています。ペトロラス交響楽団も、ブラジル国営石油企業ペトロラスが

運営しているブラジル屈指のメジャーオーケストラです。

スポンサーがなんといっても純利益がトヨタ並の巨大企業というだけあって、メンバーのレベルもインターナショナルかつ高いものがありました、チェリストのアントニオ・メネーゼスさんの弟さんなんかもメンバーで演奏しているんですよ。

澤:ちなみにリハーサルって何語でやったんですか？

中:スペイン語です。オーケストラ側の希望は、ポルトガル語、スペイン語、イタリア語、英語の順番でしたね。
本番の演奏会が行われたリオの市立劇場はオーケストラのチェリストだったトスカニーニが急病の指揮者の代わりに急遽、指揮をしてセンセーショナルなデビューをした伝説の場所でした。日本人の指揮者がここで指揮をしたのは岩城宏之さんらに続いてあなたで3人目だ、と言われました。

澤:6月は、もう1箇所ブラジルで指揮したんだよね。

中:6月10日にポルトアレグレ交響楽団を指揮しました。ポルトアレグレはブラジルの南の都市でウルグアイなどに近い街です。
気候的にはヨーロッパに近く、そのせいか欧州系の移民の子孫たちが多く住んでいて、おいしい地元産ワインが飲めるんです、
またウルグアイに近いだけあってスペイン語を話す人もとても多くいました。

澤:ブラジルの印象はどうか？

中:例えばリオは、正直言えば治安などの面では日本やヨーロッパに比べて少し不安な面もあるんですが、
それを忘れさせてしまうくらい美しい街でした。とても広い国ですし、
地域によっていろんな特色もあり、また、何と言っても住んでいる人たちが最高で、一度行くとまたもう一度訪れたいくなる
不思議な魅力のある国ですね。

この1ヶ月でブラジルには切っても切れない愛着を感じるようになりましたよ。